

第2章 生活復興感の規定因としての生活再建課題

生活復興感は、震災後の現実によく適応してはじめて得られるものであり、どのくらい日々の生活への充足感、満足感をもち、将来の生活への明るい展望を感じているかによってその度合いは測る事ができるとして、「生活復興感」得点という指標を作成した。生活復興感得点と個人属性との関連を調べる事によって、女性より男性が、若い世代の方が年配の世代より、生活復興感が高いことがわかった。また家屋の被害程度が高い、全壊全焼、半壊半焼の人は生活復興感が低いことがわかった。

生活復興感を規定する要因は何であるのか。

震災から5年目を迎えるにあたって、被災地内で行われた震災復興検証において、被災地にくらす市民にワークショップへの参加を呼びかけ、直接生活再建に関する言語データを集めた。そのデータを集約したところ、7つの要素が浮かび上がってきた。この「すまい、人と人とのつながり、まち、こころとからだ、そなえ、行政とのかかわり、くらしむき」を生活再建課題7要素とした。この際に着目されたのは、被災者として当然関心の高い「すまい」のデータに続き、「人と人とのつながり」カードがカード枚数で2位を占めた事である。被災者は、身の回りの環境でのミクロな課題を大事な生活再建の要素と捉えている事が明らかになった。

「生活再建課題7要素を達成することで、生活復興感が高くなる」との仮説に基づいて、それぞれの課題について質問項目を作成し、生活復興感との関連を調べた。

1. 生活再建課題7要素との関連

1) すまい

大部分の人のすまいの復興は完了した(図4)

すまいについては、安住感についてたずねた。具体的には「あなたはこれからも、ずっと暮らしていきたいと思いませんか」として「引っ越したい、ずっと暮らしていきたい」の2選択肢を与えた。生活復興感との関連を調べたところ、永住希望なしで「引っ越したい」と答えた人の生活復興感は低いという傾向は見られたものの、統計的に意味のある差は見出せなかった。これは、全体の81.7%の人が、現在の住まいに満足しており、永住希望ありで「ずっと暮らしていきたい」と答えているためと考えられる。

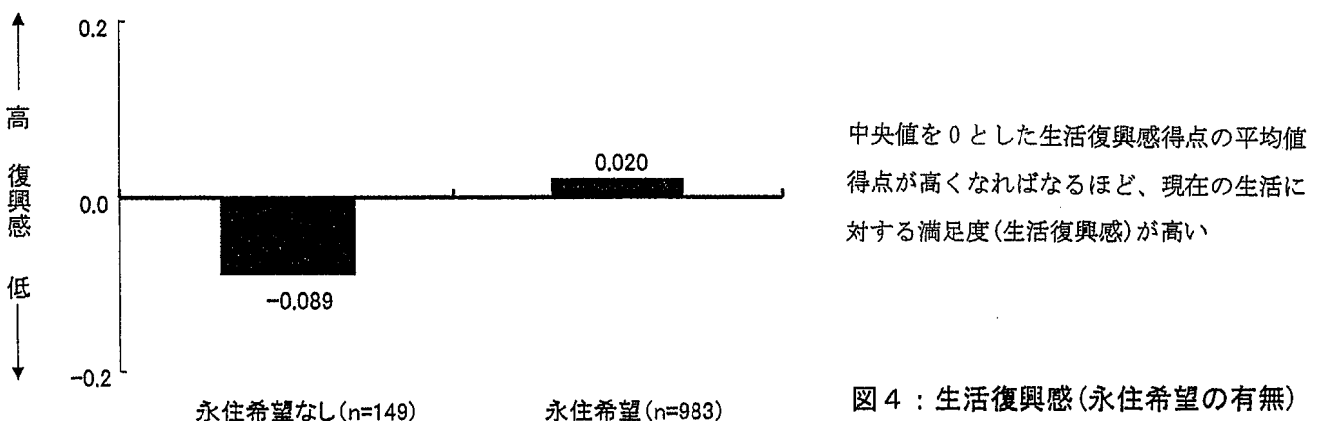


図4：生活復興感(永住希望の有無)

現在、社宅住まい、住宅を所有している人は、生活復興感が高い(図5)

生活復興感と現在の住まいの形態との関連を見たところ、社宅に住んでいる人の生活復興感が最も高かった。社宅住まいの人は、職も安定しており、また職縁(職場の人間関係)が生活をする際の助けとしてプラスになっていると考えられる。次に自分で住宅を所有している人たち(持地持家、分譲集合住宅)の生活復興感が高かった。逆に、自分で住宅を所有していない人たち(公営住宅、借地持家、公団・公社、借家)の生活復興感は低かった。民間賃貸集合住宅に cưす人たちの生活復興感は中庸な値をとっており、住宅所有と非所有者の間に位置していた。

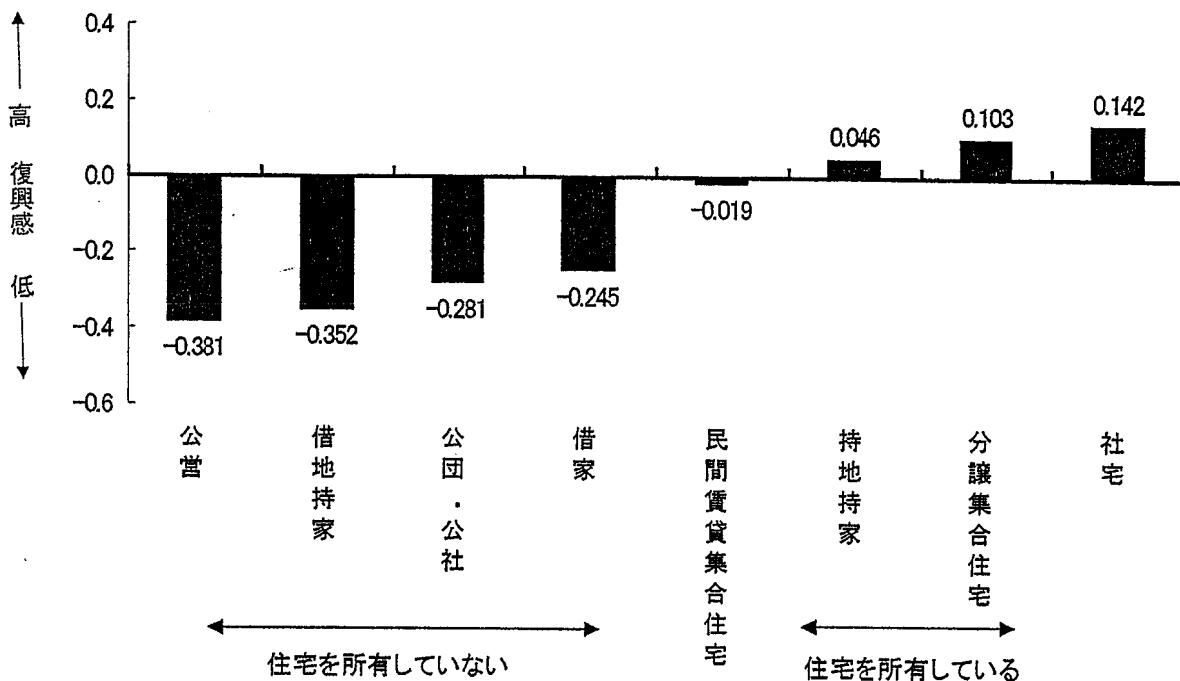


図5：生活復興感(現在の住居形態別)

中央値を0とした生活復興感得点の平均値

得点が高くなればなるほど、現在の生活に対する満足度(生活復興感)が高い

2) 人と人とのつながり

和も己も大切にする人は生活復興感が高い(図6)

つながりに関しては、震災後被災地に生まれようとしている新しい価値観「市民性」をその指標に用いた。市民性はその回答傾向から4つのグループに分けられる事がわかった。第一のグループは、人の和は大切にすが自分自身は大切にしない「集団主義」回答群である。第二は、人の和も自分自身も大切にしない「他人(ひと)まかせ」回答群である。第三は、自分自身は大切にすが周りの和を重んじない「身勝手」回答群である。これは集団主義とは対照的な態度である。第四が最も市民性が高い回答群であり、自分も大切に、かつ人々のとの和も保つ事ができる「和己共存(わこきようぞん)」である。

生活復興感とこの4つの回答グループとの関連を調べた。すると、和も己も大切にする「和己共存（わこきょうぞん）」グループに属する人々の生活復興感が最も高かった。次に日本の本来の価値観である和は大切にするが己は大切にしない「集団主義」のグループが次に高かった。反対に最も生活復興感が低かったのは、己も和も大切にしない「他人（ひと）まかせ」のグループで、己は大切にするが和は大切にしない「身勝手」グループが次に続いた。

震災によって被災地に生まれた新しい価値を自分自身の価値観とした人の生活復興感が高いことが明らかになった。

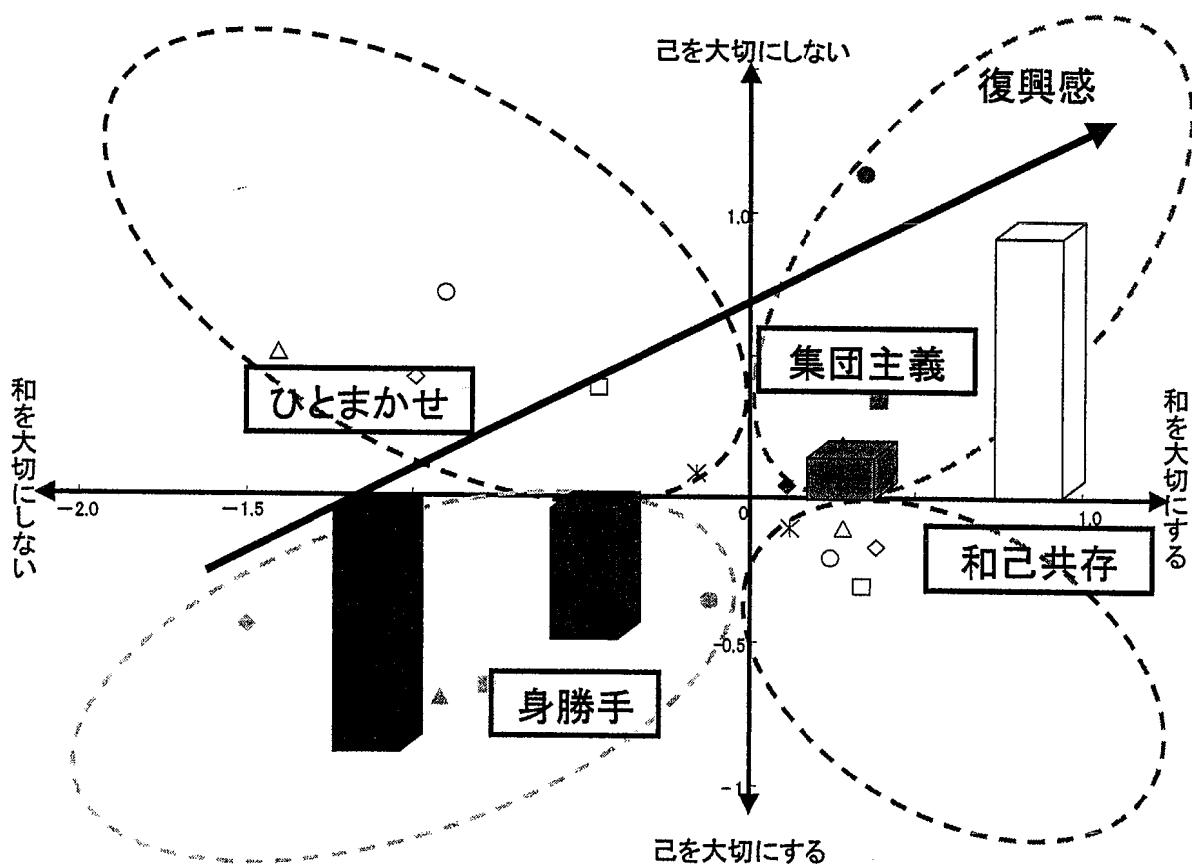


図6：生活復興感(市民性)

中央値を0とした生活復興感得点の平均値

市民性の図(本文P72図15参照)に、生活復興感と市民性との関係を重ねた。

近所づきあいが多ければ多いほど、生活復興感が高い(図7)

地域活動にたびたび参加する人は、生活復興感が高い(図8)

近所づきあいに関しては、おすそわけする家の数、遊びに行く家の数、買い物や食事に行く人の数の3設問、地域活動に関しては、まちのイベントに参加する頻度、まちのイベントに世話役として参加する頻度、まちの日頃の活動に参加する頻度をたずねた。それぞれと生活復興感との関連を調べたところ、近所づきあい、地域活動に関して、積極的に関わっている人ほど、生活復興感が高いことがわかった。

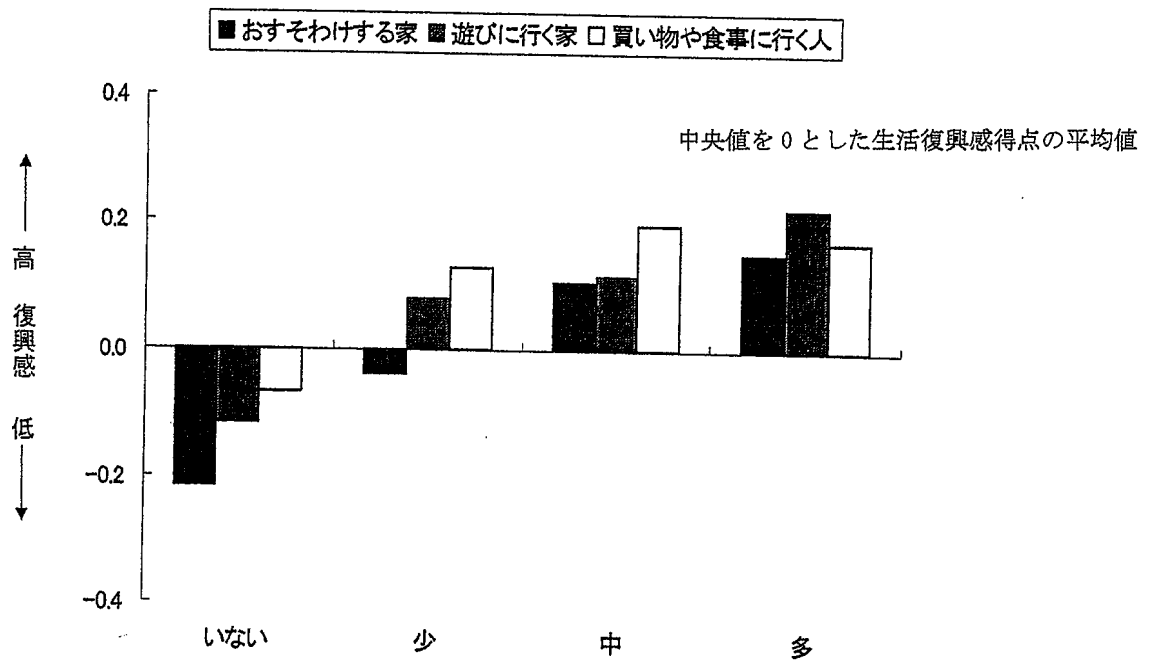


図7：生活復興感(近所づきあい)

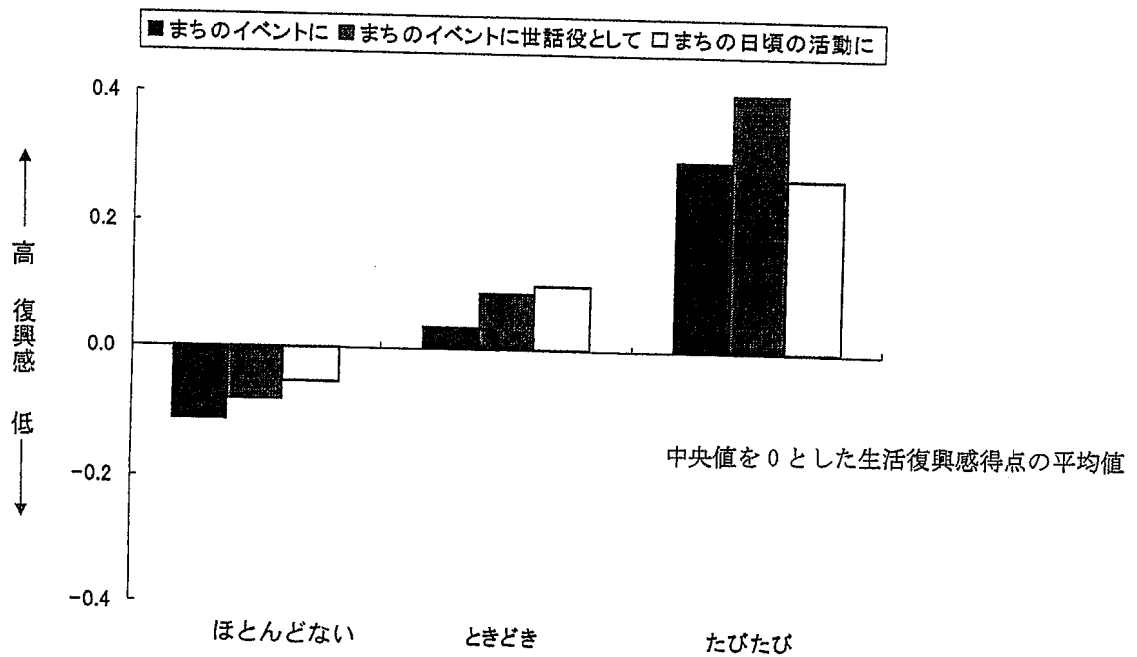


図8：生活復興感(地域活動への参加)

家族成員間の心理的な結びつき（きずな）が、中庸なバランスの取れた家族ほど復興感が高い(図9)

家族成員間のリーダーシップのあり方（かじとり）が、中庸なバランスの取れた家族ほど復興感が高い(図10)

家族関係の機能を「きずな」と「かじとり」という二つの側面から調べた。きずなとは家族成員間の心理的・社会的な距離を指す。かじとりは家族内のリーダーシップや役割関

係、決まりなどを状況の変化に応じて、変化させる柔軟性を示している。通常の社会生活では、「きずな」「かじとり」ともに中庸でバランスのとれた場合に、家族関係の機能度が最も高まることが知られている。逆にきわめて低すぎるか、高すぎる場合には、家族成員を支える力が弱まると考える。

家族関係のあり方と生活復興感との関連を見てみると、家族成員間の心理的な結びつき（きずな）、リーダーシップのあり方（かじとり）ともな中庸なバランスの取れた家族ほど生活復興感が高かった。

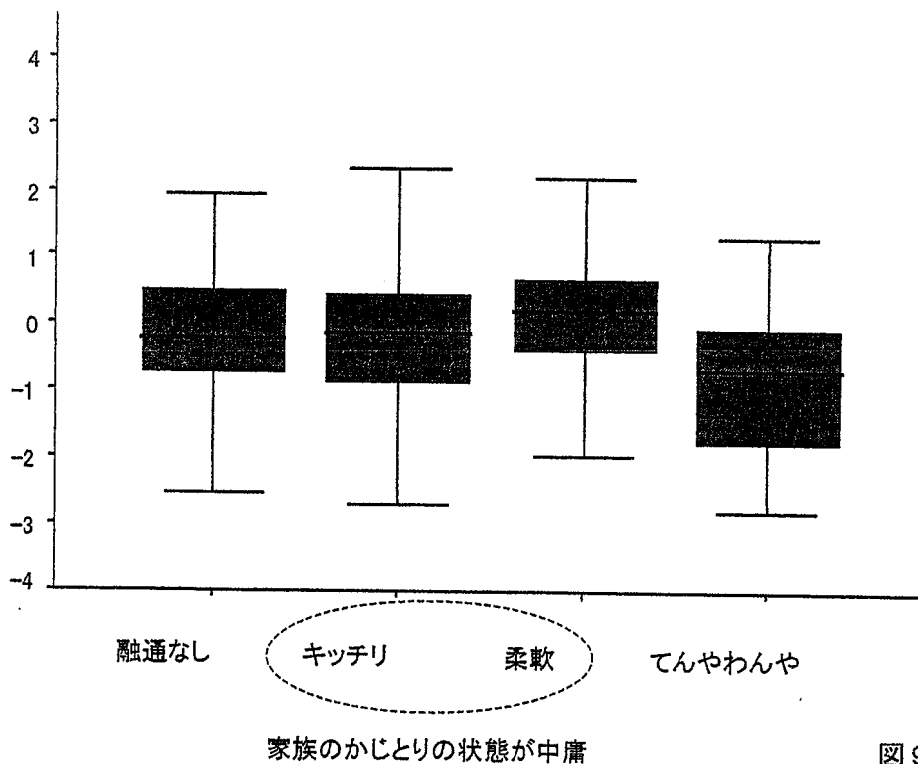


図9：生活復興感(家族のきずな)

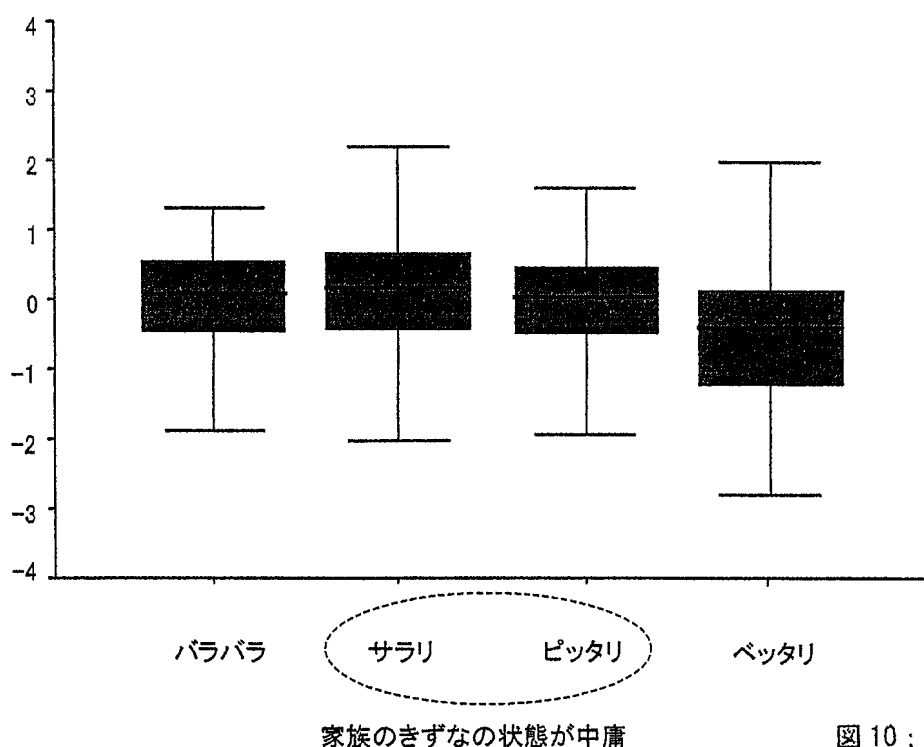


図10：生活復興感(家族のかじとり)

3) まち

まちの復旧・復興を遅いと感じている人は、生活復興感が低い(図 11)

まちの復興イメージにおいて、自分の「まち」の復旧・復興を「かなり速い」「やや速い」と答えた人に「速い」「ふつう」の人に「ふつう」「やや遅い」「かなり遅い」と答えた人に「遅い」のカテゴリーを与えて、生活復興感との関連をみた。その結果、まちの復興は「遅い」とした人に、生活復興感の低い人が多かった。「ふつう」とした人の生活復興感平均値は0に近かった。「速い」とした人は、比較的生活復興感が高かった。

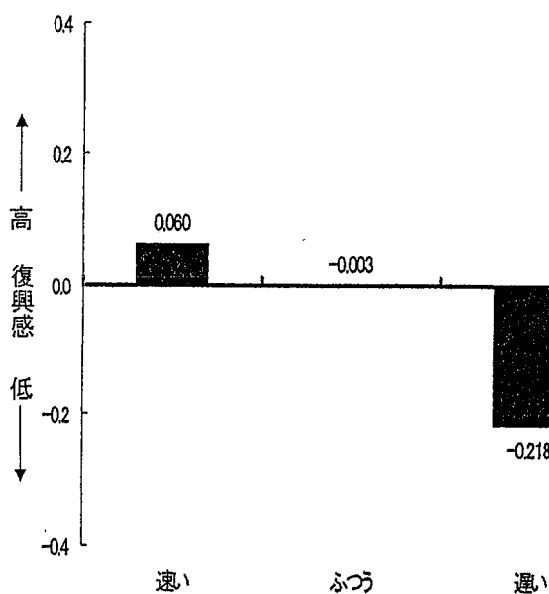


図 11：生活復興感(まちの復旧・復興イメージ)

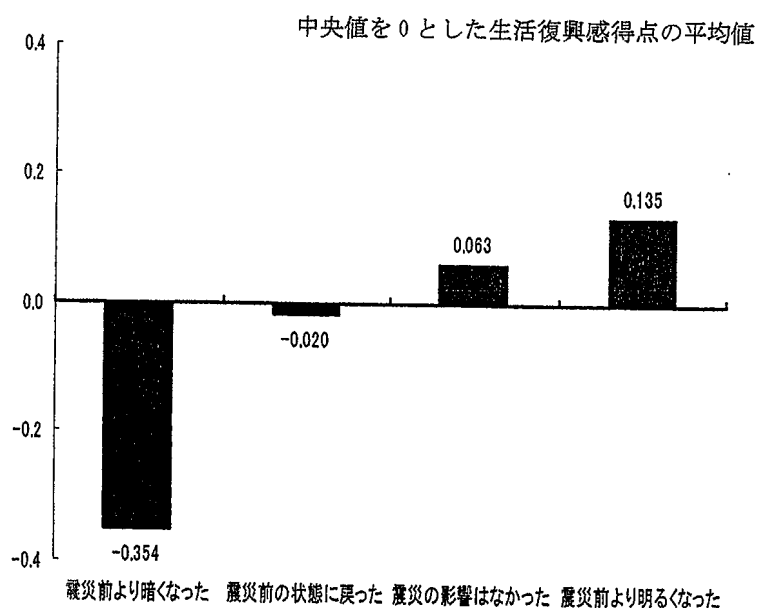


図 12：生活復興感(地域の夜の明るさ)

地域の夜の明るさを「震災前より暗くなった」と感じている人は、生活復興感が低い(図 12)

まちの復興イメージにおいて、自分の地域の夜の明るさを震災前と比べてどう感じているかと生活復興感との関連を調べた。その結果、「震災前より暗くなった」と答えた人に生活復興感が目立って低かった。逆に「震災前より明るくなった」と答えた人に生活復興感が高かった。「震災の影響はなかった」とする人の生活復興感が次いで高かった。「震災前の状態に戻った」と答えた人の生活復興感の平均値は中庸な値をとっていた。以上の結果から考えられる事は、まちが元の状態に戻る(復旧)では、人々の復興感が高くも低くもない値をとっている。まちが震災前よりよい状況になって(復興)はじめて、人々の生活復興感は高くなるのがわかった。

自分の住んでいるまちに対しての愛着が深いほど、生活復興感が高い(図 13)

まちに関しては、まちの愛着度を測った。自分の住んでいるまちの価値をどれだけ認識しているかで、震災後さまざまに変化したまちに対して、どのような思いを抱いているかを調べた。生活復興感とまちの愛着の関連は、まちへの愛着が高ければ高いほど、生活復興感が高いことが明らかになった。

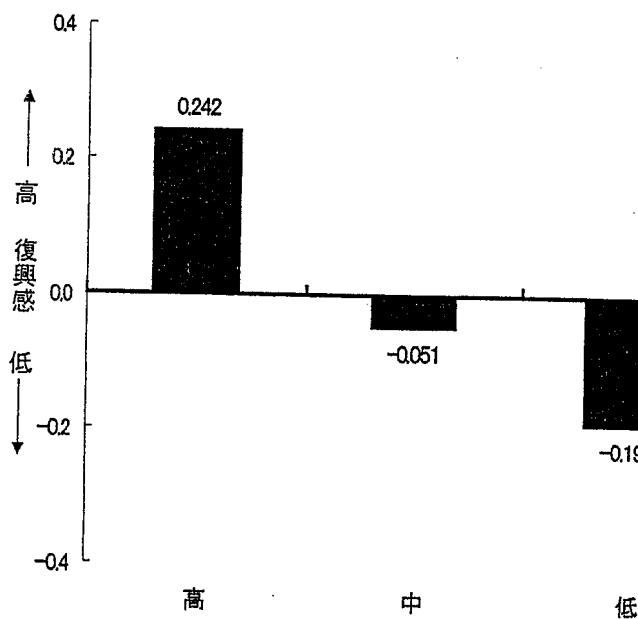


図 13: 生活復興感(まちへの愛着)

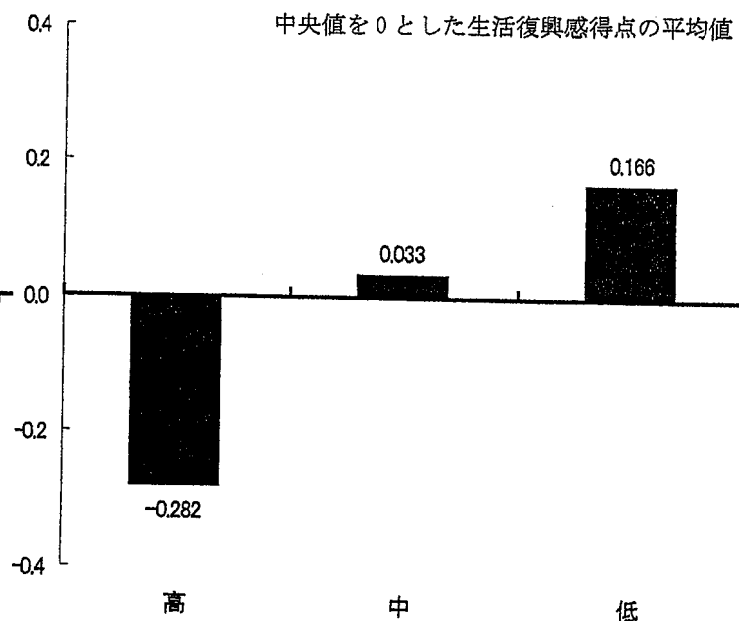


図 14: 生活復興感(南海・東南海地震の被害予測)

4) そなえ

将来の被害予測に関して、甚大な被害の起こる可能性が低いと考える人に生活復興感が高かった(図 14)

将来の災害に対するそなえにおいては、2040 年ごろに発生が予想される南海・東南海地震における人的・物的(家屋・家財)・生活・まち・人と人とのつながりに対する被害予測をたずねた。生活復興感と将来の被害予測は、将来の災害によって甚大な被害がもたらされる可能性が低いと考える人に、生活復興感が高かった。これは被災体験を自分の中で整理し、その客観的な評価ができていない生活復興感の高い人は、将来再度自分にふりかかるであろう被災体験について、過大評価しないことが明らかになった。

5) こころとからだ

こころのストレスが低い人ほど生活復興感が高い(図 15)

からだのストレスが中庸な人ほど生活復興感が高い(図 16)

こころとからだのストレスについては、ここ 1 ヶ月のこころとからだの状態についてたずねた。生活復興感とこころのストレスとの関係は、こころのストレスの低い人ほど生活復興感が高かった。生活復興感とからだのストレスとの関係は、からだのストレスが中庸なほど生活復興感が高かった。これは適度なストレスは、からだを健康に保つというストレスの生理反応のモデルにも合致している結果である。

健康習慣の良好な人ほど、生活復興感が高い(図 17)

人々の日常生活における健康習慣をたずねた。生活復興感と健康習慣との関係は、健康習慣が良好な人ほど、生活復興感が高いことがわかった。いかに毎日を健康に生きるかに留意している人ほど、生活復興感が高いことが明らかになった。

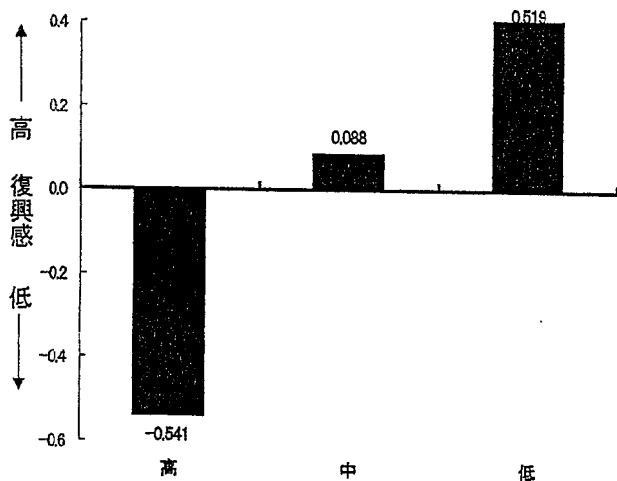


図 15：生活復興感(こころのストレス)

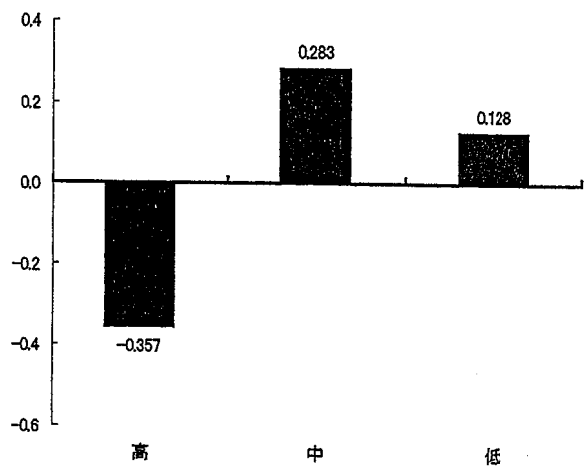


図 16：生活復興感(からだのストレス)

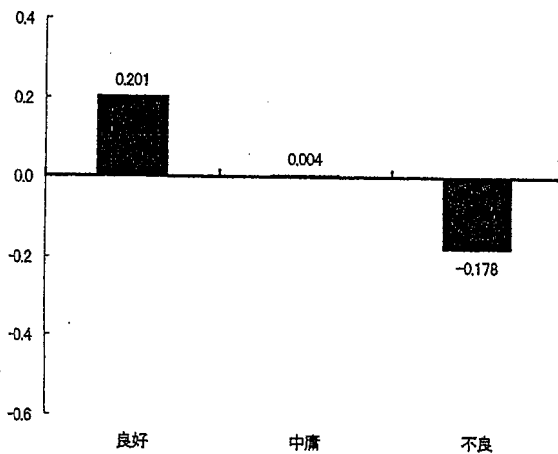


図 17：生活復興感(健康習慣)

中央値を0とした生活復興感得点の平均値
得点が高くなればなるほど、現在の生活に対する満足度
(生活復興感)が高い

6) くらしむき

家計の収支が「黒字」「トントン」の人は生活復興感が高い(図 18)

家計の収支が「赤字」の人は、生活復興感が低く、回答者の 68.9%を占めている

家計の収支が生活復興感に与える影響を調べるために家計調査の結果を以下のように整理した。家計調査は、本調査の質問紙のなかで、市井に出回っている家計簿の形式をかりて、収入・支出・預貯金に関して震災前と現在の変化を「増えた・変わらない・減った」の3選択肢で回答を求めた。得られた回答から、収入・預貯金については「増えた」とした回答には+1点、「変わらない」には0点、「減った」とした回答には-1点を与え、支出については、「増えた」とした回答には-1点、「変わらない」には0点、「減った」とした回答には+1点を与えた。それらを回答者ごとに足し合わせ、+となったものを「黒字」、0となったものを「トントン」、-の値となったものを「赤字」とした。その結果と生活復興感との関連を見ると、「黒字」に次いで「トントン」となった人は生活復興感が高く、逆に「赤字」となった人は、生活復興感が低かった。また家計が「赤字」の人は、617人であり、家計の設問に回答した人の68.9%を占めた。

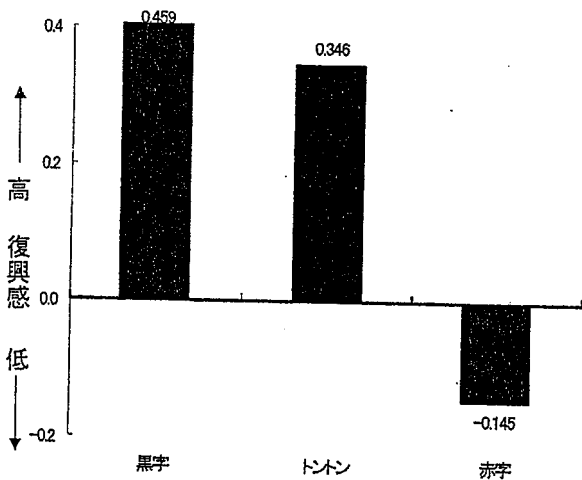


図 18：生活復興感(家計)

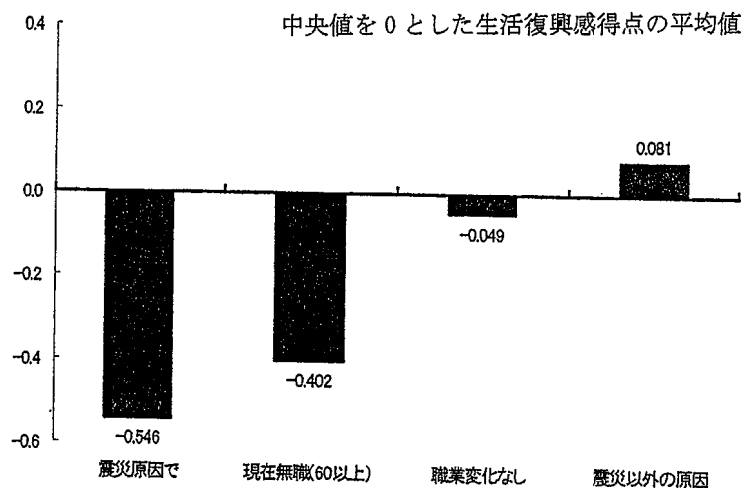


図 19：生活復興感(震災後の転職理由)

震災前後の職業変化の中で、震災が原因で転職した人の生活復興感が最も低い
 震災前後の職業変化の中で、震災以外の原因で退職した現在 60 才以上無職の人の生活復興感が、次いで低い(図 19)

震災前と震災後で就いている職業の変化について質問した。生活復興感と職業変化との関連を見ると、震災が原因で転職した人の生活復興感が最も低かった。次いで、震災後退職して現在は職に就いていない 60 才以上の人の生活復興感が低かった。このグループは年齢が原因で退職を余儀なくされた人たちではないかと考えられる。震災前と後で職業に変化はなくずっと同じ職場で働いている人の生活復興感は、比較的中庸な値をとっていた。最も生活復興感が比較的高かったのは、震災以外の原因で転職したグループであった。

7) 行政とのかかわり

公共的なことから、市民の積極的にかかわりによって担われるべきだと考える人に生活復興感が高かった(図 20)

震災を契機に、市民と行政との関係に新しい価値観が根付こうとしている。震災以前は、行政に全てまかせておけば、後見人としてこれ以上の存在はないとする「後見主義的」考え方、市民一人一人が自由な考えでふるまっていけばよいとする「自由主義的」考え方の二つの考え方が多かった。震災後はボランティアや市民の共助の重要性を認識する機会を得て、元来行政だけの仕事と考えられていた公共的なことから市民の積極的関与によって担われるとする「共和主義的」考え方が定着しつつあると考えられる。市民と行政とのかかわりかたについてどのようなものがよいと思うか回答を求め、回答者を「後見主義」「自由主義」「共和主義」的考え方の 3 つにタイプわけした。その結果と生活復興感との関係は、共和主義的考え方の人は生活復興感が高く、自由主義的考え方、後見主義的考え方に回答した人は生活復興感が低かった。市民性と同じように被災地に新しく芽吹いた考え方を受け入れている人ほど生活復興感が高いことがわかった。

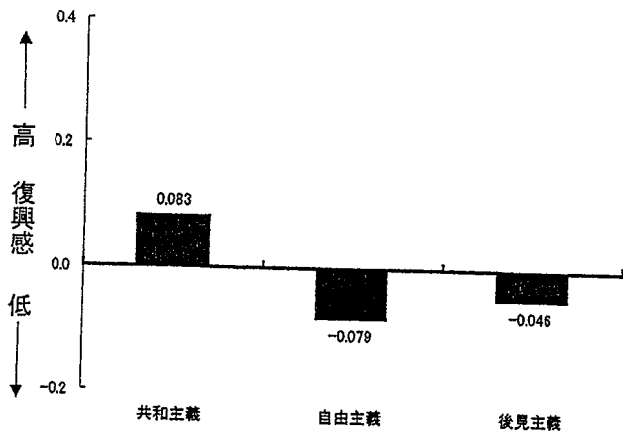


図 20 : 生活復興感(市民と行政との新しい関係)

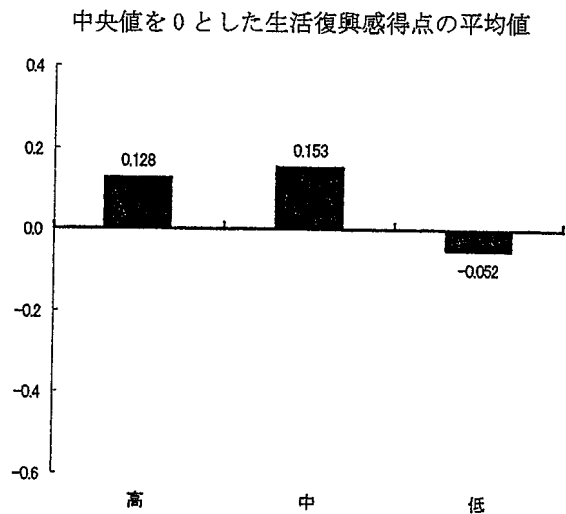


図 21 : 生活復興感(地域を維持するための負担金)

地域を維持するための負担金を惜しまない人は、生活復興感が高い(図 21)

地域活動や市民活動を行うために、どの程度の負担金を提供する意思があるのかたずねた。その結果、地域を維持するための負担金を惜しまない人(中央値である年間 1000 円以上の負担金を提供できる人)は生活復興感が高く、負担金の額が低い人(年間 1000 円未満の人)は生活復興感が低かった。地域の活動に積極的関与を行う意思のある人ほど、生活復興感が高いことがわかった。

2. 生活復興感を規定する要因モデル

前項までは、個々の項目(変数)が、生活復興感にどのような影響を与えているのかを明らかにした。本項では、項目全体で生活復興感に与える影響をみた時に、それぞれの項目がどの程度の強さで生活復興感に影響しているのかをみた。つまり、多くの要素を同時に用いて、生活復興感との関連を明らかにするための一般線形モデルによる分析を行った。

結果をわかりやすい形で図示した(図 22)。生活復興感を規定する要因として、基本属性・被害程度(図 22 左上部分)と、生活再建課題 7 要素を用いた。その結果、できあがったモデルにおいて、各規定因が生活復興感に対して強い説明力を持つものを、より太い矢印で示した。

表 2 は、図 22 の結果を具体的に数値で表したものである。この表が示すとおり、1999 年に被災地で震災総括検証を行い、直接市民から言語データを得て抽出した、生活再建課題 7 要素をもとにつくったモデルが、生活復興感を約 6 割(59.3%)説明することができた。

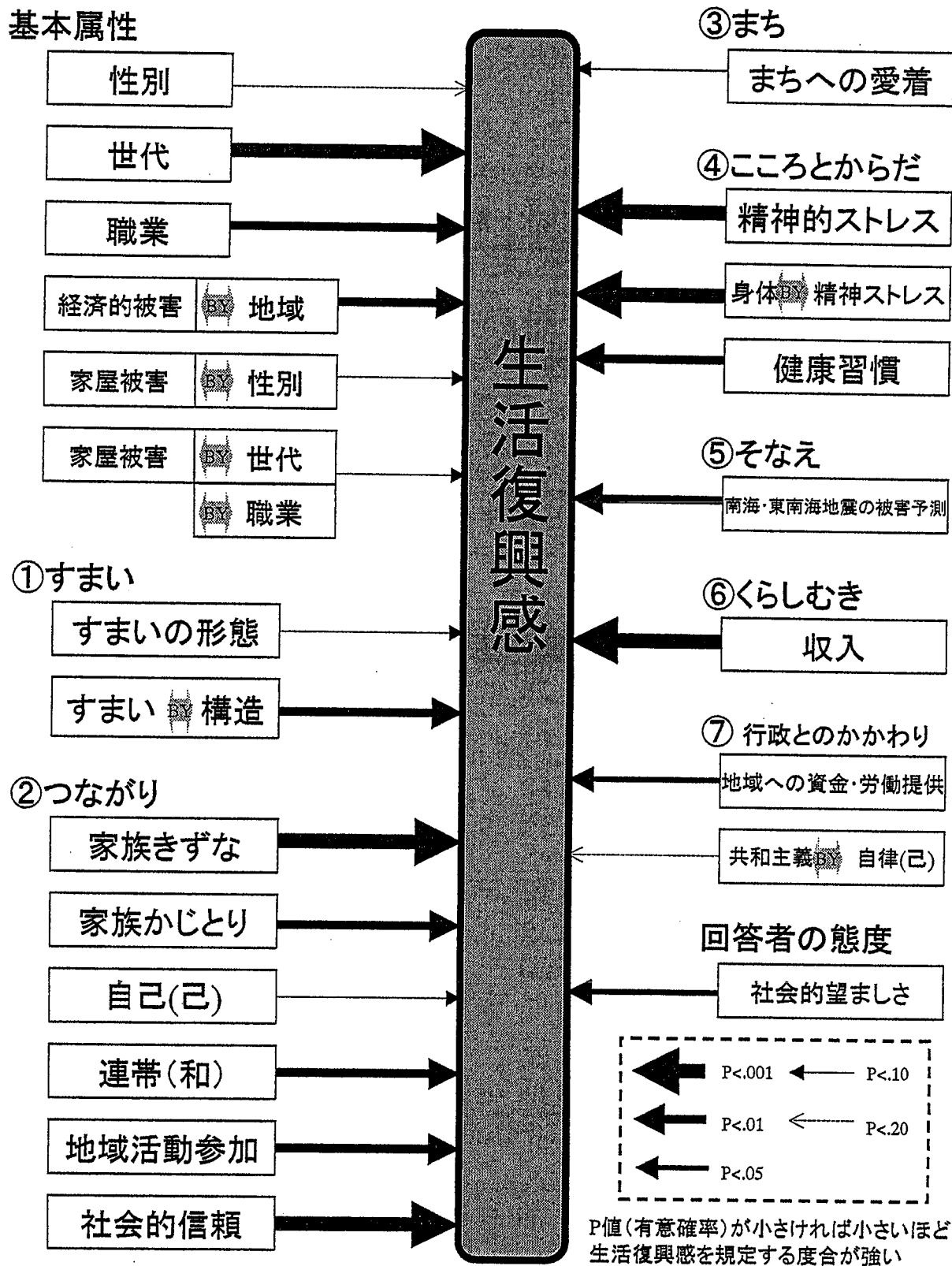


図 22 : 生活復興感を規定する要因モデル

表 2 : 生活復興感を規定する要因モデル

変数		タイプⅢ 平方和	自由度	平均 平方	F値	有意 確率	偏イータ 2乗	P
修正モデル		713.293	307	2.323	4.255	.000	.593	**
切片		0.517	1	0.517	0.947	.331	.001	n.s.
被害程度	家屋被害	1.202	3	0.401	0.734	.532	.002	n.s.
基本属性	地域	7.834	16	0.490	0.897	.573	.016	n.s.
	地域 * 経済被害	83.035	128	0.649	1.188	.089	.145	n.s.
	性別	1.148	1	1.148	2.102	.147	.002	n.s.
	世代	16.898	2	8.449	15.473	.000	.033	**
	職業	15.115	9	1.679	3.076	.001	.030	**
	性別 * 家屋被害	4.144	3	1.381	2.530	.056	.008	n.s.
	世代 * 家屋被害 * 職業	68.308	86	0.794	1.455	.006	.123	**
①すまい	すまいの形態	8.260	8	1.033	1.891	.058	.017	n.s.
	すまいの形態 * すまいの構造	14.954	12	1.246	2.282	.007	.030	**
②つながり	家族きずな	11.449	3	3.816	6.989	.000	.023	**
	家族かじとり	6.574	3	2.191	4.013	.008	.013	**
	自律(己)	2.028	1	2.028	3.713	.054	.004	n.s.
	連帯(和)	4.098	1	4.098	7.505	.006	.008	**
	地域活動への参加	6.398	1	6.398	11.718	.001	.013	**
	社会的信頼	8.374	1	8.374	15.336	.000	.017	**
③まち	まちへの愛着	1.824	1	1.824	3.340	.068	.004	n.s.
④ところとからだ	身体的ストレス	0.850	3	0.283	0.519	.669	.002	n.s.
	精神的ストレス	57.138	3	19.046	34.880	.000	.105	**
	身体的ストレス * 精神的ストレス	15.790	8	1.974	3.615	.000	.031	**
	健康習慣	5.674	1	5.674	10.391	.001	.011	**
⑤そなえ	南海・東南海地震の被害予想	3.795	1	3.795	6.951	.009	.008	**
⑥くらしむき	収入	18.161	3	6.054	11.086	.000	.036	**
	支出	2.121	3	0.707	1.295	.275	.004	n.s.
	預貯金	1.892	3	0.631	1.155	.326	.004	n.s.
⑦行政とのかかわり	地域への資金・労働提供	3.544	1	3.544	6.490	.011	.007	*
	共和主義 * 自律(己)	1.358	1	1.358	2.488	.115	.003	n.s.
回答者の態度	社会的望ましさ	2.278	1	2.278	4.172	.041	.005	*
誤差		488.707	895	0.546				
総和		1202	1203					
修正総和		1202	1202					

$R^2 = .593$ (調整済み $R^2 = .454$)

* $p < .05$ ** $p < .01$

偏イータ 2 乗の値が大きければ大きいほど
生活復興感に与える影響が大きい